昭和からの伝言（5）
ー玉音放送を作った男たちー

土田　良吉

前号でも述べたように、75年前の１９４５（昭和20）年８月15日正午、ラジオによる「玉音放送」にて、太平洋戦争の終結が全国民に告げられました。それまで、天皇陛下の肉声を聞いたことのなかった国民はその衝撃と共に日本の敗戦を受け入れました。思えば、この時こそ此の国が民主主義への第一歩でした。この玉音放送にはそれを実現へと導いた仕掛け人がいたのです。

その人は、ときの内閣情報局総裁であった下村宏氏です。彼は昭和18年にいち早く玉音放送のプランを着想し、昭和20年８月に天皇に単独拝謁して玉音放送実施を訴えました。そして実施に漕ぎつけるや、其れを阻止しようとする反乱軍と対峙し、15日の放送を死守したのでした。

５年前、ＮＨＫは『玉音放送を作った男たち』のテーマで放送の企画や放送に携わった人々をドラマ形式で放送しました。当時の、混乱・絶望の局面が、つぶさに描かれ、終戦間際に急遽実現したものではなかったことがわかりました。あの歴史的な放送を実現した人々の姿に、戦中派の自分は驚きと共に強い衝撃を受けました。玉音放送は、下村宏氏と彼を支えた人々の永い間のたたかいを経て、初めて実現したものでしたが、下村氏たちは、どのような困難を経て玉音放送を実現させたのでしょうか。

このドラマはその知られざる物語であります。音声を活字化し記録にとどめることにしました。

まず、下村宏（明治８年～昭和32年）〈玉音放送を作った男〉の執念が語られます。時は大正14年に遡ります。下村は、そのころ長く勤めていた逓信省を退官し（大正10年）、豊富な海外経験を生かし、言論活動を始めました。大正11年朝日新聞社に入社。日本の国際化と世界平和を訴える「日本民族の将来」（朝日新聞社版）の著書をあらわします。

下村夫人「夫の下村は、家ではよく和歌を詠んでいました。わたしが、佐々木信綱という短歌の有名な先生の弟子だったからかも知れません」。

≪　この当り李鴻章の邸なりしか
　　握りたる手の冷たかりし思い出　≫

夫人「李鴻章とは清国の宰相だった方ですよね？」

下村「清朝が、北清事変に負けた直後に会った事があ

る。終戦の交渉ですっかり、やつれ果てていてね。握手した手が氷のように冷たかった。国が敗れるという事はどういうことか身にしみたよ。ところで、この歌の出来ぐあいは如何かね」「歌は自由に思うことを詠めば良いのです。出来の事等気にすることはありません」「下手でもいいと言う意味にもとれるが！」「そうも、とれますわね！」

その頃下村は、大正14年開局したばかりのラジオ局、東京放送局から主演依頼を受けていました。東京放送局は日本初のラジオ局で、後に日本放送協会に統合されます。下村は講演の人気が良く、有名になり、出演を依頼されるようになります。

大正14年、放送記者「本日のラジオ講演は朝日新聞社専務の下村宏さんに、お話し頂きます。講演の内容は「新聞常識」です。お願い致します」。

下村「本日、私は、声による新聞、即ちラジオを通じまして新聞の持つ利便につき、お話を致します。おととし（大正14年）の関東大震災の折には様々な流言飛語が飛び交い・・・こうした災害時を含め、社会の出来事に対し、新聞がなるべく早く正確に調べて、事実を明らかにすること。これこそが、新聞の重大な使命であると考えました。又こんにちは、保守に革新自由と、政策が分かれ利害関係が錯綜しております。このような時は新聞が常に公平な見地に立ってあらゆる世論、あらゆる意見を網羅する事で、云々・・・」と、新聞を通じて言論の自由を訴えました。一方で新しいメディアであるラジオは、次第に国民に普及しはじめ、下村も全国的な有名人となっていきます。

下村「地方の講演に行ったとき、山ほども名刺をいただく、礼状を書くのが追いつかんのだよ」。

夫人「ラジオの影響って凄いんですね」。

下村「新聞記事を書いている時とは反応が違う。私の声を知っていると、会ったことのない人でも親しみの気持ちを持つらしい」。夫人「ラジオを聴いている人からすると、あなたが家に来て話しているように思うのでしょうね」。「うーん、ラジオ放送とは不思議なものだ。新聞には無い力がある」と。しかし当時のラジオ放送は、法律上も政府の管理下に置かれていたため、検閲によって発言が止められることもありました。

―大正14年制定の無線電信法より―

昭和6年、満州事変勃発いらい益々厳しくなります。

昭和7年のこと。放送中に思わぬハプニングが！！

下村「何となく愚図ついて陰鬱であります。めいめいが、ちぐはぐに勝手な御託を並べておる。政党は、互

いに敵の党を倒すために、なんら手段を選ばず、官僚は各省が夫々・・・、<とつぜん、放送が途切れます>下村「なぜ、マイクのスイッチを切ったのか？」。政府情報員の声「政府としては今の様な発言は許可するわけにはゆきません」と言う。下村は、検閲に対するその時の怒りを著作―下村著「南船北馬」綴っております。

――昭和７年――。

下村「今や、新聞以上に影響力をもつ放送が独占されている。それが、いちいち時の政府のおぼし召しに付いてまわるというのも、新聞も偏に時の政府の機関新聞とするが良い」と言うと、

夫人「あなたにも反省するところはあると思いますけど・・・。真正面から切り込めばよいと言うものではありません。相手を怒らせて発言の機会を取り上げられたら、元も子もありませんよ」

下村「しかし、」

夫人「相手の顔を立てながら言うことも大事だと思いますよ」

それに、夫人にはもう一つの心配事がありました。『下村は天皇陛下のお写真や記事を数多く掲載した―大正14年発行アサヒグラフ―ことで、さまざまな団体から、抗議や脅迫を受けていたのです。しかし、お写真を載せることで、陛下への親しみの気持ちを高めたい。下村は純粋にそう考えていたようです。―即位の礼（昭和３年）の際の昭和天皇お写真のこと―しかし陛下の写真が御真影と崇（あが）められていた時代ですから、それを雑誌に載せるなど、不敬だと考える人も多かったのです。何事も自由である方がよいという考えは、少しは早すぎたのかもしれません』と夫人は心を痛めていたという。

昭和12年ころ、朝日新聞社を退職した下村は、大日本体育協会会長に就任しました。そこで一人のアナウンサーと出会います。―その人は、歴史的実況放送をした和田信賢（しんけん）さんです―

和田アナウンサーの声、《昭和14年1月15日「双葉山敗る！双葉山敗る！69連勝中、70連勝を目指して躍進する双葉山、出羽一門の新鋭「安芸の海」に屈す！」双葉山に土がつくという大場面でした。和田さんの張り詰めた声が全国のファンを沸き立たせていました。彼はあらゆる方面で活躍する当時の名アナウンサーでした。あるとき、下村夫人が和田アナウンサー言う。

「和田さん！　この間の朗読、とても素敵でしたわ。ラジオ小説も朗読なさるんですね」。

和田「ええー、僕はアナウンサーという職業を単なる

トーキングマシーンに留めたくないのです。朗読者としても一流でありたいし、また何よりも、あらゆる声の表現のプロ、そして声優とでも呼ぶ存在にまで高めていきたいんですよ」と、話すと
下村「声優？和田君は全てに意欲的だな。君が望むような放送ができるといいんだが。支那事変以来、ラジオも国防色が強まってるようだし・・・」。あるとき、
和田「下村さんは今の時局をどのように見ておられるのですか？」
下村「うーん！、国際的な評判はよろしくない。日露戦争の時には日本はまだ弱かったから、世界の国が同情して味方をしてくれた。だが、いまの日本は強がっているから、諸外国は支那に同情し、日本には反感を強めている」
和田「いずれは日米戦もありうるのでしょうか」
下村「そうならなければいいと思っているが。君は、そうなったらどうするね？」和田「僕はアナウンサーですからその時はその時で、アナウンサーの仕事を全うする、其れしか考えられません」。

昭和12年に始まった支那事変（日中戦争）は拡大の一途を辿っていきました。アメリカは日本に対する警戒心を益々強め、日米の緊張感は高まりました。下村は著書（来るべき日本・昭和16年）で『「日米開戦」など無意味で馬鹿げたことだ』と訴えていましたが、ついにその日がやってきました。

昭和16年12月8日未明、けたたましい電話のベル。
「和田さんですか。至急電報をとって…大至急！！」
「はい」―12月8日午前6時、日本放送協会放送会館内で―。『帝国陸海軍は本未明、米英両国と戦闘状態に入れリ』と、の電報である。和田「分かりました」
―チャイムー「臨時ニュースを申上げます。大本営陸海軍部12月8日、午前6時発表、帝国陸海軍は本日未明、西太平洋において、アメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れリ」局員「どうされました？。これだけの大ニュース。原稿を読むだけでは駄目です。音楽を入れよう…」♪♪。

開戦と共に政府は、日本放送協会に「放送の全機能を挙げて戦争遂行に邁進（まいしん）すること。放送番組は全て、国家目的に即応せしむる事を、通達してきました。―内閣情報局の放送指導要綱―。開戦当初、日本は怒涛の勢いで勝ち進みましたが、昭和17年6月の、ミッドウェー海戦の敗北により一転して、戦局は悪化、以後は敗北に敗北を重ねていきます。それにも

拘わらず大本営は、日本軍の戦果を大きく伝える偽りの発表を続け、国民に真実が告げられることはありませんでした。

日米戦には否定的だった下村。しかし、開戦ののち、戦争を肯定し、アメリカを批判する立場をとりました。その一方で、このような文章も発表しています。「大東亜戦争の出鼻から、余りにも華々しい戦績が続いたので国民はいささか、楽観気味となったきらいがある。この程度で勝ち戦（いくさ）になってしまうのでは、話が余りにも美味（うま）すぎる」。夫人「当時の、夫の心中はとても複雑だったのでは？」と語っています。

―下村宏著「国民の心構へ」から―

昭和18年の5月、下村は、日本放送協会の会長に就任し、戦時下の放送に直接関わることになりました。

「いやいやいや、よく来てくれたね」

下村は体育協会時代に知り合った久富達夫さんと、川本信正さんを側近として招きました。久富さんは毎日新聞の海軍担当記者で、軍部にも政府にも顔のきく人でした」。川本さんは、読売新聞社のスポーツ記者で、オリンピックのことを五輪と訳した最初の人でした。

下村「これからラジオ放送について、いろいろと改革していきたいんだ」。両名「どのような事を」。「まず、情報改革の必要があると思っている」。

川本・久富両名「情報改革ですか？」。

下村「今は、国民に実際の戦局が伝えられていない。負けているのに、勝った勝ったとやっていては、気が緩む者も出てくる。そこを改め、なるべく正しい情報を伝えたいと思っている」。

久富「情報統制は敵もやっています。非常時ですし」。

下村「程度と言うものがある。スポーツで考えてみたまえ。勝つと油断しきって、最後の粘りが効かなくなりなる。不利な時には不利を知らしめることも大切なんだよ」。

久富「それは確かに・・・、内閣情報局に改善を要求して見ます。確かに情報改革は必要とは思いますが、国民の気持ちを、もっと明るく高揚させるような放送も必要じゃないんですか」「、ここのところニュースや説教くさい番組ばかりで、国民もきゅうくつな思いをしていると思うんです、それについては、情報統制の上からの押し付け番組ばかりでラジオ放送に魅力がなくなって、逆効果ではないかという議論が出ていましたが」。

下村「そりゃー、そうかも知れんなー君たちに言われて考えたんだが、陛下にラジオに御自らご出演頂き、国民に直接語りかけて頂く、というのは如何だろうか」

久富「…陛下にですか！？」
下村「陛下のお声をラジオから聴いたら国民はさぞや、感激するだろう。様々な困難にも耐えて、頑張ろうと思うだろう。そうは思わないか？」
久富「確かにそれは・しかし」「実現は難しいのではないでしょうか。陛下のお声を拾ってしまっただけでも、大問題になったと聞いております」
下村「其のような事はささいな事だ！放送が実現すれば、陛下のもと国民が一つになる機会ともなろう。それはこの時期大事な事だ」
一同「天皇陛下ご自身のお声による放送というと「大号令」ですね、もし実現したら大変なことです。画期的な放送になります」。と異口同音だった。
　このように昭和18年、玉音放送の計画は既に走り始めていたのです。しかし、この時は、それを実現させる事ができませんでした。下村は計画を木戸幸一らの陛下の側近に相談したのですが『話にもならない』と、拒否されてしまうのでした。
下村「直接のご出演が難しいのなら帝国議会での勅語を録音させて頂きそれを放送する形でも構わないとお願いしたのだが。陛下のお声をラジオで流すなど不敬だと考えているのでしょうね。むしろ陛下と国民が相親しむ事こそが重要なのだが」。
久富「内閣情報局にも行ってまいりましたが、大本営発表について、我々には、一切修正する権限がないので、どうしようもないとのことでした」
下村「政府がそう言うことなら、こちらでは、どうする事もできんな。」
久富「残念ですが・・・」国民に真実を告げる情報改革もこの時は実現できませんでした。
　戦局は、日本はソロモン、サイパン、などと敗北を続け、昭和20年2月、硫黄島が遂に敵の手に落ち、更に、追い詰められていきました。本土への空襲も本格的になります。日本放送協会は、軍と連携してラジオで空襲警報を・・・。空襲警報は各地の軍司令部におかれた放送室から流されていました。ところが放送中、「敵機が襲来してきました・・・、何をするんですか」。
情報将校「訂正箇所を追加する。それまで放送は待て。敵も放送を傍受しているのだ。迂闊な情報は出せん！」。
久富「馬鹿な・・・国民の命が、かかっているんです！」
将校「参謀の決裁がなければ放送できないこと、忘れたか！」強い口調と、ブザーの音。『警戒警報、警戒系譜、東部軍管区情報。敵機、房総方面を通過し京浜地区に接近せり。敵機は逐次、潜入せり。いずれも高度

高く侵入。官民共同の防空体制の強化を望む。敵機、房総方面を飛行中・・』が連呼されます。住民「灯火管制だ。防空頭巾を、―爆撃機の音―お母さん・・」爆撃機から爆弾の投下される轟音・・修羅場となる。軍部の情報統制によって警報の発令が遅れたことで、東京大空襲では多くの国民が犠牲になってしまいました。大勢の人から言われました。「警報が遅すぎる。間もなく侵入と言ったときには、もう来ている。焼夷弾が落とされたあとから空襲警報がでる。何処が空襲されているのか、何処に逃げるか分からない」と。「僕は何も言えませんでした」「軍は腐っていますよ。国民の命より、自分たちの対面を良くしようとしているんです！」「空襲警報まで検閲するなんて、一体どういうことなんだ」放送員たちの怒り、心頭に…！！

下村「最も恐れていた事だ。空襲は国民にとっては災害だ。多くの国民の命の犠牲につながってるんだ」

昭和20年4月、天皇陛下の強いご意向で、鈴木貫太郎さんが、第42代内閣総理大臣に任命されました。鈴木首相は、殆ど面識のなかった下村を呼んで、総理「下村さんには、ぜひ内閣情報局総裁および国務大臣として、入閣して頂きたいのだが・・」。

下村「私に？」。

総理「もはや、この戦争には勝ち目がありません。然し、軍は意地になって頑張っている。そうしている間にも、空襲の被害は酷くなるばかりです」。

下村「国全体が焦土となったら、そこから再び、芽吹く事も出来なくなるでしょう」。

総理「その通りです。そうなる前に、如何にかして時局を収拾したいのです。私は政治の世界にいた訳でもないので、頼む人もいない。だが、下村さん、あなたならと言う思いがあるのです」

下村「なぜ私をそこまで…」

総裁「時局の収拾を急ぐあまり、軍部を刺激しては元も子もなくなります。表向き戦争の継続をしながら、その裏で終戦の恒作をすすめる、そんな二枚腰も必要となるでしょう。あなたなら其れが出来るのでは…」。

下村「この老骨をそこまで買って下さるなら、是非お力添えさせて頂きたいのですが、ただ一つだけ、お約束していただきたいことがあるのです」。

総裁「どういうことでしょう？」下村は久富らに、その時のことをこう語った。「国民の時局にたいする正しい認識を深めさせたい。そう鈴木さんに申し上げたところ、快諾していただいた。情報改革を実現し、国民

の理解のもとに終戦に持ってゆく。私はそのために入閣することにした。君たちに、また、力を貸してほしい。久富君には、情報局の次長として。川本君には、秘書官として来てもらいたいのだが、どうだろうか。川本「体育協会組の僕らが大仕事をする訳ですか。面白そう」久富「我々の手で、報改革を進めましょう」。下村「ありがとう。ありがとう」。

4月7日、鈴木貫太郎内閣が正式に誕生した。下村は、内閣情報局総裁として閣僚に加わります。下村は、夫人に向かって「お前に言われたことがあるなー〈相手の顔を立てながら言う事が大事だ〉と、夫人「下村はラジオで、どんな発言をする気なのか、私はとても不安になりました」と語る。昭和20年4月27日、下村「情報局総裁に就任以来、各方面から様々な意見要望を頂いたが、その中で最も多いのは次の2点である。まず『我われ国民は覚悟を決めているので、今更、驚きも悲しみもしないので、事実は事実として、真相を明らかにしてくれ』という意見である。この点については私も全く同感である」と。また「今日では、如何に弁護しても強がっても、景気づけても形勢の不利は明らかなのである。サイパンに次いで硫黄島も敵の手に渡り、本土が頻々として、空襲を受けている現状に対しては、楽観のしようがないのである。それだけに、時事の真相は明らかにすべきで、これを隠すことは、かえってデマ、流言の原因となる。そう思う次第である」。と下村は強く語った。

これを聞いていた軍情報部は「何を言ってるんだ、こいつは・・・」将校一同、机を叩いていきり立った。下村「どうして良いか分からない今は、『天皇陛下に大号令を出して頂き、我らの進むべき道を示してほしい』という要望がある。これを如何にして強力に実行すべきか。それを検討しなければいけないと思っている」。と、心中を語った。

しかし、このあと、軍情報部はラジオで「今こそ前線も銃後もない。一億国民は一つの火の玉となり、決死の覚悟で沖縄の戦いに総力を挙げ、海陸総特攻の皇軍将士おとび現地島民諸君の敢闘に、応えなければならない。一億総特攻あってこそ、神州（しんしゅう）は不滅であり、大東亜戦争の完遂、期して待つべきである」と、檄を飛ばした。

自宅を出るとき、下村は「しばらくは官邸に詰める。うちには帰って来れないので留守を頼む」。夫人「承知しました。この間はお見事でしたね」。「ん？」。夫人「軍が好むような演説をいれておけば、何を話しても問題

にはされない、そういうお考えだったのでは？」
下村「改革には程のよさが必要なんだよ。行き過ぎてもいかんし、留まりすぎてもいかん」「難しい、報われないお役目ですね。首尾よくいったとしても誰からも感謝されない。むしろ非難されるかもしれないしね」。
下村「昔こんな歌を詠んだな。
《この当り李鴻章の邸なりしか
　握りたる手の冷たかりし思い出》」。
夫人「覚えております」
下村「皮肉なもんだな。私は今、清朝の終戦工作をした李鴻章（りーふぁんしゃん）と同じ立場に立っているんだからね。だが、わたしは、この国を清朝のように滅びさせはしないよ」
夫人「行っていらっしゃいませ」。
　下村の就任以降、新聞などの報道は、徐々に真実に近いものに改められていきました。其れは日本の追い詰められた状況を、国民に報せるものでも有りました。7月に入ると、本土各地への空襲や機銃掃射も更に激しさを増し、多くの都市が次々の焼け野が原になってしまいます。国民の犠牲は、計り知れないものとなって仕舞うのでした。
　昭和20年7月26日、連合国はポツダム宣言を通告、『これを受け入れなければ、日本を全面的に破壊する』と、伝えてきたのです。
　昭和20年8月1日、
　下村「もはや、ポツダム宣言を受け入れる以外、この国を守る術はない。だが、いまだ、陸軍は本土決戦を主張してやまず、国論はまとまっていない」。
久富「陸軍は、本土決戦をして勝てるつもりなんですかね？」
下村「勝てないまでも、本土決戦で、敵に一泡吹かせて、有利な条件で和平に持ち込むという考えのようだ。本土決戦などしたら、どれだけの国民が犠牲になるか。だからと言って、宣言受諾を急げば、陸軍は政府を倒す動きに出るかも知れないし」。
久富「うちなる敵ですね、下村総裁！。一つ提案があるのですが。以前、下村さんがおしゃっていた玉音放送ですが、今こそ、それを実現させられないものでしょうか。終戦にもってゆくには、軍部も国民も、誰もが納得する一つの形が必要だと思うのです。それには、陛下に自らマイクに立って頂き、じかに終戦を宣言して頂くのが良いと思います。政府がそれを決めてくれれば間髪を入れず陛下に、其れをご放送頂く。そうすれば、軍部も、従わざるを得ないでしょう。ラジオを

通じれば、全国民が一斉に其れを聴くことになり、国民の混乱も抑えられると思います」。
下村「陛下のもと、国民が一つに纏る。そのための玉音放送だとしたら、たしかに今がその時かも知れん。分かった！久富君、是非、その方向にもっていこう」。
久富「有り難うございます！」。
下村「よし、ご放送のことは私が直接、陛下にお目にかかって、お願いすることにしよう」。
川本「拝謁の手配は如何しますか？木戸さんに頼むと、途中で話を潰されてしまうかもしれませんし。私の同級生が、内閣の総務課長をしているんです。彼は拝謁の日程調整をしてるんで、便宜を図ってもらえますよ」。
下村「よし、そうしてもらおう。なるべく急いでたのむよ」。川本「分かりました」。玉音放送の計画が、終戦の宣言として具体化した瞬間でした。しかし・・・・。

昭和20年8月5日、
久富「拝謁の許可は未だ出ないのか」。
川本「軍が神経質になっていて、陛下に人を会わせないよう、横やりを入れてるらしい。ほとぼりが冷めるまで拝謁は待ってくれと言われて・・・」。
久富「待ってくれって・・・そんな、のんびりした話じゃないんだよ。一刻を争うんだよ！」。川本「はい」。

その翌日の昭和20年8月6日、広島に原爆が投下される。川本「何か・・なにか得体の知れない強烈な爆弾だそうですね」。久富「あれは原子爆弾だ。物質の核となるところが原子だ。それをある力で分裂させると、ものすごいエネルギーが出る。それを使った爆弾だよ」。
川本は、下村総裁室へ。
下村「いいところへ来てくれたね」。「これを鈴木総理に届けてくれないか」。川本「承知しました」。それは、【右か左か御決断の秋。昭和20年8月6日.下村宏】。
下村の固い決意文でした。鈴木首相は暫くの間、下村の「右か左か・・・」に見入り考えこんでいたが、川本に「わかりました」。を伝えた。両雄、意気投合。決定的な瞬間となった！！

8月8日、川村のもとに「今日、拝謁の時間がとれた」と連絡が入り拝謁が急遽決まった事に下村は驚く。
昭和20年7月26日、下村と川村は、拝謁に赴きます。
「ご案内いたします」。拝謁室へ、「下村が参りました」恐る恐る、陛下と対面します。下村『このような言上の機会をお与え頂き、まことに光栄至極に存じます。情報局総裁に就任以来、数々の改革を試みてまいりましたが、如何せん、民心の動向は希薄さを増しております。日夜の爆撃によって絶望の気分すら生じ、政府

に対し、軍部に対しての信頼は日を追って薄れております。戦争は始めた以上は、戦い抜くばかり、ただ勝つのみであります。しかし、戦局の将来を見通して、どうしても勝つ見込みのないときは、いかに収拾し、日本民族を温存すべきかを、念とすべきかと存じます。今日、国歌興亡の難局に対しては君民相和し、一層の親しみを持って一体となるほかに道はありません。私は、以前から、玉音をマイクを通じ、国民全般へと念じて参りましたが、玉音放送など、とんでもないと阻止され、頭から問題にされませんでした。しかし今や日本帝国興亡の時。そんな窮屈な事など言っておられません。至るところからマイクを通じた「大号令を」という声が聞こえてまいります。これは、「親しく、御聖断を仰ぐべき時なり」という、一億国民の心待ちのあらわれと存じ上げます』。こうした下村の考えに、天皇はありがたいお言葉を仰せになった。下村は恐縮拝受し退室します。控え室の川本に、下村は「私の気持ちを申上げると、陛下には、大変良い参考になったとのお言葉があった」「玉音放送できるかも知れん」と、力をこめて話します。川本「はい」。互いに手を握り、よろこび合うのです。―下村宏著「終戦記」直筆原稿（昭和23年）より―。首相にそのことを話すと、聴いた鈴木首相「それは大成功でした。陛下が『参考になった』と、おっしゃったのは、『朕、大いに嘉尚（かしょう）す』―私は大いに褒め讃えたえる―という事です。下村さん！これは、あなたにしか出来なかった事です。本当に良くやって頂きました」。二人は固い握手で歓び合います。しかし、翌9日長崎にも原爆投下の大被害が！！14日の御前会議で、天皇陛下は、ポツダム宣言を無条件で受諾する御聖断を下されました。その際、陛下は「国民に呼びかける事がよければ私は何時でもマイクの前にたつ」と、述べられました。これにより、陛下自らが国民に終戦を告げる「玉音放送」の実施が決定されたのでした。

8月14日午後、首相官邸で下村は鈴木総理から「玉音放送の実行総責任者」として任命されました。先ず、陛下のお声の部分を録音することが決まると、つづいて放送日時に検討にはいります。

8月14日午後、首相官邸の国務大臣室において、下村「玉音放送を全ての国民に聴取させるためには、放送の日時が大切である。私は、明日15日正午の放送が良いと思うが」。

久富「陛下のお読みになる詔書は、今日中にできあがりします。急げば今夜にでも放送は可能ですが」。

下村「今夜では、玉音放送がある事を、国民に周知徹底させる時間が足りない」。
久富「それでは明日15日朝の放送は如何ですか。成るべく早いほうが良いのでは…」
下村「朝は、ラジオの聴取が低いんだ。会社や学校に行く者や畑に出る者もいるからね。聴取率が一番高いのは、お昼だ。そこに玉音放送を持っていきたい」。
久富「では玉音放送は正午に。その前に、重大な放送がある旨、予告放送をするというのは如何でしょう？ただ、放送を明日のお昼にすると、新聞の朝刊のほうが先になってしまう」。
下村「新聞報道が先行するのは拙いな。国民には、まずもって、陛下のお声で終戦を報せる形にしないと、では朝刊の配達を遅らせることにしよう。朝の配達をやめて、午後に延ばして貰おう。そうすれば、国民は、玉音放送を聴いた後で新聞を読むことになる」。
久富「それでいきましょう」。

8月14日午後、―日本放送協会会館にて―

久富「和田君、いま上から連絡が入ってね。玉音放送の責任者が君に決まったよ。終戦のいきさつを解説するニュースを30分流す。担当も君だ。暦史的な仕事になるが、頼むよ」和田「分かりました」。

8月14日午後、―首相官邸、国務大臣室にて。

下村「新聞、各社には、終戦報道の論調をしぼらせる。指導方針を出すから、それに従うように！」
久富「言論指導をするのですか？」。
下村「つつがなき終戦を実現させるためだ。軍の反乱を誘発したり、徹底抗戦を主張する記事を書かれたら、国内が混乱する。一億国民が平和的に終戦を迎え、一致団結して復興に向かう。その一点に論調を絞らせる。これに反する者は取り締まれ」。力強い指示であった。

しかし、予想よりも早く、事態は激しく動いていたのです。所謂、宮城事件です。陸軍の一部の将校たちが、玉音放送を阻止しようと動き出していたのです。畑中健二少佐は、国体・つまり、天皇制を中心とした国の秩序を絶対視する皇国史観の大の信奉者でした。畑中「ポツダム宣言には、国体の護持を保障する条項がありません。そんなものを受け入れてしまったら、この国の根幹そのものが揺らいでしまいます。その前に決起しましょう！！放送を阻止し、陛下のお心を翻し、戦争を継続させるのです」「分かった。同士を募ろう」。「ありがとう」。若い将校たちの決起の瞬間でした。

8月14日深夜、近衛第一師団司令部師団長室で。畑中少佐「閣下！聖旨は君側の奸によるもの、英明なる

陛下は、かならず、戦争の継続をご決意なされます。さいわい、未だ、陛下の終戦の詔勅は放送されておりませぬ。皇国を救うのは唯一つ、閣下さえ立っていただければ、全陸軍は、救国のため挙げて奮起します！どうぞ、ご決心を！」。

森師団長「ならん！宮中をお守りする近衛師団としては，御聖断に反する行動をとる事はできぬ」・・・・畑中の机をたたく激しい音・・・・。

「閣下！本当に決意のご意思はありませぬか？」「ない」師団長の強い言葉。師団長が去ろうとするのを遮って、銃声が・・。「ぐっ」「うう・・」森師団長の苦渋のうめき。畑中少佐は近衛師団長を殺害。偽の通達を出して師団を掌握してしまう。

同じころ陛下の詔書の朗読を録音する作業が始まる。

陛下「声は、どの程度で、よろしいか？」

下村「声は、普通のお声で結構でございます」。

川本「では、録音をお願い致します」。下村は陛下に手をさし延べます。そして、へかしこきも、マイクの前に立たせたまう大御姿（おおみすがた）をまのあたりにして。下村宏は胸が篤くなります。終戦の詔書の朗読を納めた録音盤は「玉音盤」と呼ばれる事になります。

8月15日未明、皇居内、坂下門前は近衛兵に固められていました。下村・川本らの車が停まると、白襷の衛兵が「この車内に、下村大臣はおられますか？」と、下村「下村は私だが」。

兵「では指示に従って頂きます」

同乗の川本「どういうことですか？近衛兵が、なぜ我われを？」銃を構えた兵達が「衛兵所に車をつけて下さい」と、強行した。

同時刻、放送会館では、ニュースの原文が練られていた。記者「通信社の原稿を基に、終戦ニュースを書けとのお達しだが、それにしても量が膨大だな。まとめるのは大変だ」。和田「原稿の上がりは、放送ギリギリでも大丈夫ですから」。「おつ！、頼もしいね」。記者「それにしても、録音に立ち会っている連中の、帰りが遅いな。流石にもう収録は終わったはずだが」。和田「そうですね」。大変なことに、そのころ、近衛師団の衛兵所では、下村ほか大勢が拘束されていたのである。

川本「上着を脱いでもいいですか」。「ならん、私語も禁止だ」。兵が息巻く。緊張したとらわれの局員大勢が緊張。「下村大臣、こちらへ」、尋問室に連行された。

「入ります」。畑中少佐「下村宏、内閣情報局総裁、国

務大臣」。下村「君は？」。「陸軍少佐、畑中健二であります。玉音盤が何処にあるかを教えて頂きたい」。下村「知って如何する？」畑中「放送を阻止し戦争を継続させます」。下村「終戦は、陛下御自身のお言葉なのだぞ」。畑中「陛下は、あなた方にたぶらかされたのです。そういう時は、陛下をおいさめして御意を翻して頂くのが誠の忠君というものだ」。
下村「陛下はご自分の身がどうなろうと、国民の為にポツダム宣言を受け入れられたのだ。それを覆すとは何ぞ忠君だ！」。強い怒りの言葉。
畑中「議論しているひまはありません。玉音盤がどこにあるか、答えて下さい」
下村「私は知らん」畑中「嘘をつくな」。
拳銃を下村の額に付ける。・・銃声が・・空発だったのか？下村が控え室に戻った。
川本「総裁！！」
「私は大丈夫だ」。
　一方で畑中は上官に拳銃を抑えられ「こらえろ・・畑中！これ以上、余分な騒ぎを起こすな」と、宥められるが、畑中はその後、玉音盤が、宮内省に保管されていることを聞き出し、捜索しますが見つける事が出来ません。そこで、さらに日本放送協会へと部隊を向かわせました。８月15日早朝、「探し出せ！館内、散れ～！足音が館内に響きわたります。・・・足音・・・。兵「放送協会の者か？」久富「そうです」「身柄を拘束する。来い」。畑中「放送責任者は誰ですか」。「私が、副部長の久富です」。畑中「我々の決起の主旨を、国民に向かって放送したい。天皇陛下の忠臣として最後の一兵まで，たたかうんだ」と、拳銃を突きつける。
「言っていることが分からんのか…」畑中が怒鳴る。
和田「待ってください！ここからの放送は無理なんです。現在、空襲警報が発令されています。警報になると、東部軍司令部からの放送に切り替わるんです。ですから、ここからの放送は出来ないのです」。「本当か」「本当です。今、東部軍から電波が出ている状態です」。「しかし何とか放送する方法はあるだろう？５分や１０分なら」。「そう言われても、我々の一存では・・東部軍の許可がなければ」。畑中は焦って「何とかならんのか、方法はないのか」。久富「どうしてもと、おっしゃるなら、そこに、東部軍との直通電話があります。直接、電話をかけたらどうですか」。「よし！」。受話器を取る。
「こちらは、畑中少佐であります。高島参謀長閣下は、おられますか？国民に訴えたいのであります。どうか、どうか、放送のご許可を願います！！」。高島司令「畑

中ッ！それは、ならん」。畑中「お願いします！我々の青年将校の、やむにやまれぬ気持ちを訴えたいのです」。高島「まかりならぬ！ご聖断を仰いで決定した以上、軽挙妄動は最も慎まねばならぬところだ！」「決して、軽挙妄動などでは・・。頼む！お願いします！どうか、どうか、放送のご許可を！」。
高島「何を言おうと放送の許可は絶対にできぬ」。
畑中、頭を垂れたまま、受話器を落し皆に告げる。
「拘束を解け。無念だが解散する。引き揚げだ…」。
8月15日、畑中健二少佐は、皇居内にて自決。
反乱の危機は終息し、下村達も無事、解放された。

8月15日午前7時、「天皇陛下におかせられましては本日正午、玉音放送をされる」と、ラジオで流されると、ラジオの前は、人だかりになる。一同「陛下が、ラジオで何か放送するそうですよ」。「何があったんですか」「何の放送でしょうね？」。
8月15日午前11時、下村総裁、川本さんが、無事で放送室に入り、和田アナウンサーに会う。
下村「君が、担当になったんだね、これは国民に終戦を告げるだけの放送ではない。国民の気持を一つにして未来に向かわせる放送でもあるんだ。その仕事を君に託す」。「分かりました」。女子局員<和田さん、頑張って下さいね>。「ありがとう。君こそ、音声の方よろしく頼むよ。男の技術員がみんな出征してしまったから、大変だろうけれど」。「お国のためですもの」。「君の家は3月の大空襲でみんな焼けてしまったんだね」。
「はい、父も母も亡くなりました」。和田「すまなかった」。「如何して和田さんが謝られるんですか」「頑張ろうな」。

8月15日午前11時55分、―放送会館―
秒針の音・・正午の時報。和田「只今より重大な放送があります」。下村「天皇陛下におかせられましては全国民に対し、かしこくも御自ら大詔（おおみことのり）をもらせ給うことになりました。これより、謹みて玉音をお送り申します。君が代♪が流れる。
玉音全文―前号で記述なので割愛します―。
下村「謹みて、天皇陛下の玉音放送を終わります」。
和田「かしこくも天皇陛下におかせられましては、万世のため太平を開かんとおぼし召され、昨日、政府をして米英支蘇四国に対し、ポツダム宣言を受諾する旨通告されました。かしこくも天皇陛下におかせられましては、同時に詔書を煥発（かんぱつ）あらせられ、

帝国が四ヶ国の共同宣言を受諾するのを、やむなきに至った所以を御宣示（ごせんじ）あらせられ、今日正午、詔書をご報告あらせられました。かしこき極みであります」。

ラジオの前の皆「負けた・・。日本は負けた。負けたんだ」。一同、涙にむせぶ。和田「国体の護持と民族の名誉保持の為、滅私の奉公を誓い奉る次第でございます」。ここでも大勢の泣き声がやまない―

和田「帝国は米英支那ソビエトの４ヶ国に対して、和を求めたのであります。帝国が、克っての日の帝国でない事は、我らの等しく銘記しなければならないところであって、我々は耐え難きを忍び、あくまでも、祖国復興に、邁進しなければならないのであります。この悲痛な事実に直面し、いまや、国民全部が責を分つべきであります。時局を痛憤するあまり、同胞、互いに傷つけ合い、その結果、経済的、社会的、道徳的混乱を惹き起こすことは皇国滅亡の因である事を固く銘記すべきと存じます。偉大な国民として更正すべき血と涙の戦いが，今日から始められました。われわれ一億は、この現時を直視し、国体護持と民族の名誉保持の最後の一線を跳躍台として、一段と苛烈なるべき復興戦に突入し、今こそ、三千年の伝統に即して、ただただ、大御心に帰一し奉り、無彊の皇運と，神州の不滅を確信しながら、君臣親和のもと、全国民一致団結して、この未曾有の国難克服に邁進すべきと存じます。ここでも(民衆の泣き声)・・・大人も子供も衝撃！！。

下村「この敗戦は、日本国民にとって、計り知れない試練となるであろう。だが私は、日本は必ず復興してくれるものと信じる。たとえ、打ち倒されても・・いや、打ち倒されたればこそ、真に目覚め、伸びて行くものだと信じる。そのための、玉音放送であった」「君たちは未だ若い。れからの日本を頼むよ」。下村はこう言うと、放送室の階段を降りて行った。久富・川本は「俺たちでやろう。其れが下村さんへの・・・」。と、涙ながら肩をたたき合うシーンが続く…。エンド。

戦後、下村は東京国際軍事裁判で、国際検察局から、A級戦犯容疑がかけられましたが、最終的には不起訴となりました。尋問調書にはこう書かれています。

「好意的に見れば、下村が超国家主義者や、偏狭的愛国主義者だという、如何なる証拠も存在しない。彼は戦争の末期になって、権力の座に就いたに過ぎない。ただ、人道主義や愛国心から行なったかも知れないが批判的に捉えると、世論を誤った方向に導いた責任は

負うべきである」。尚、玉音放送に関しては一切の記述はありませんでした。それも下村にとっては、本望だったのかも知れません。歴史の陰である事を望んでいる人でしたから・・・。

下村さんが手がけた玉音放送から今年(令和２年)で、75年目の節目に当ります。和歌山県出身、〈１８７５，５，11～１９５７，12，９〉。東京帝国大学卒。…１９４５，５，17、勲一等瑞宝章受賞。鈴木内閣で国務相兼情報局総裁を務め、在任期間１９４５年４月７日～同年８月17日。終戦直後、戦犯として一時拘留され、後に公職追放を受ける。昭和28年にフランスにて82歳の生涯を閉じました。

和田信賢さんは、昭和21年、日本初のクイズ・トーク・バラエティ番組「話の泉」の司会者として、国民的人気アナウンサーとなりました。不幸にも、昭和27年、ヘルシンキオリンピックの実況を勤めた直後、病没されました。久富達夫さんは国立競技場会長として、また川本信正さんは日本オリンピック委員として活躍しました。

本稿は５年前に放送されたＮＨＫテレビの全編採録でした。長文になりましたことお許し下さい。

令和２（２０２０）年９月記

視聴者の声

「ドラマ部分の出演者を有名俳優で固め厚くした歴史秘話ヒストリア、という感じ。柄本明（下村宏）の演技は良かったよ。明治～昭和に生きた気骨ある人物になり切っていたと思う」。「夫人は一流の歌人。味わいのある下村ご夫妻は見せどころ・・・」。

「陸軍少佐による放送妨害、高橋一生演じる畑中少佐は、粗野な言葉遣いをさせなかったなど良かったがドラマというより再現ＶＴＲダイジェストといった感じ」。

「瀬戸康史さん、我が家で少し前に『声が素敵な俳優さんだ』と話していたところだったので、和田アナ役とわかり『やっぱり！』と深く頷きました。

「和田アナウンサーが音声担当の女性に語りかける場面で、台詞にはない、冷静で真剣に仕事をする姿に、しゃんとせねばと、涙を引っ込めるシーンがありました。時代背景が簡潔に説明されていて感動的でした」。

「最後に和田アナが読んだ終戦関連ニュースは当時の原稿又は録音が残っていたのか、国民の心構えを説く部分の格調が素晴らしかった！繰り返し見たいと思う」

「戦争を知らない世代には、貴重な歴史秘話ではないでしょうか」

おわり